

大田区ものづくり優秀技能者表彰  
「大田の工匠百人」

平成二十三年大田区ものづくり優秀技能者表彰「大田の工匠百人」の表彰式が、六月十五日に行われました。平成二十三年度は二十七名の方が受賞され、蒲田西地区から二名の方が受賞されましたので、ご紹介いたします。

金属加工の達人

高野 年康さん



昭和十一年、東京浅草生まれの七十六歳です。現在、工場長を務める西蒲田一丁目にある鉄工所の敷地内には直径五十cm、厚さ三十cmほど、重さは約一トンもあるドーナツツ型の鍛造された特殊鋼が無造作にごろごろと置いてあります。

この鋼材を精密加工して大型発電機の部品に仕上げていきます。大手機械メーカーを通じて火力、水力あるいは原子力発電所に納入されて行きます。鍛造材特有の性質を熟知して、複

雑な形状を狂い無く仕上げていくには、長年の経験と知識が必要です。人間いくつになっても勉強であるという、先代社長の教えを守り、今日まで一生懸命仕事に取り組みしてきました。

高野さんは、六十年間仕事一筋に打ち込んできましたが、旋盤職人の外にもうひとつの顔を持っていました。それは趣味として三十年以上続けてきたソフトボールの審判員です。勉強をして資格をとり、萩中、羽田の中学校等のソフトボールの試合や、大田区体育大会での審判員として活躍しています。

「仕事も趣味も一生懸命に打ち込むことが楽しさにつながると思っています。」

お別れの際の一言でした。

(取材 石渡、塩田委員)

切削工具加工の達人

高橋 久夫さん



新蒲田三丁目の工場に高橋さんを訪ねた。

高橋さんは昭和十一年神奈川県秦野市出身、高校卒業後、も

ともと好きだった機械部品加工の現場に就職した。蓮沼で、旋盤を扱

う職人さん五人ほどのごぢんまりしたところだったが、若い時期ここの五年、懸命の修業が高橋さんの優れた技能者としての基盤を築くことになった。一度の転職を経て三十五歳のとき一念発起、池上の地で独立、六年後現在の場所に。この道一筋、五十五年間切削工具加工の仕事が続けてきた。

切削工具とは一般にカッター、ドリル等であり、高橋さんはこれら大様々な鋭利鋼材を研磨したり、これに超硬材を蝋づけする加工で精度を高める。

作業場は明るく、旋盤が数台整然と設置されていて、手堅く誠実とお見受けした高橋さんのお人柄を反映していた。

製品をいくつか拝見させてもらったが、いずれも一ミリ未満の精度が求められる作業であり、その造形の美しさと丁寧な仕上がりに感動を覚えた。

これらは自動車や製鉄メーカーに納入される。

やはりバブル崩壊を境に経済情勢は大きく変わったが、借金をしなかつたので大事に至らなかった。

継続は力なりと言うが、自分の力だけでは続かない。相手さまと双方にメリットがある設計の工夫やアライメントなどが、信用や信頼につな

がったものと思う。

日本のモノづくりの技術は、どこにも負けないと思うが、昨今のとかく安価なもの、安易なものに流れる社会は心配と顔を曇らせた。

現在もうひとりの職人さんと二人で仕事を続けている。小学児童の職場訪問はあつても、ここで働きたいという人はなかなかいない。

自分の技術は全て教えたいと思っているの、どうか後に続いてくれることを願っている。

心身ともに若々しい高橋さんではあるが、これからの世代を考え日々の思いを淡々と述べられた。

(取材 鎌田、幅委員)

蒲田西特別出張所管内

人口	男	31,490人
	女	29,153人
	計	60,643人
世帯	33,168世帯	

平成24年8月1日現在

※平成二十四年七月の法改正に伴い、今号から外国人住民の方も含まれています。

情報紙に対するご意見やご感想、投稿などを、事務局までお寄せください。  
事務局 蒲田西特別出張所  
大田区西蒲田七十一-二一七  
(三七三二)四七八五

平成24年9月1日発行

# かまはし

第45号

発行 地域力推進蒲田西地区委員会  
編集 地域情報紙編集委員会

わがまちの顔

「梅ちゃん先生」の旋盤指導

佐久間 正巳さん



戦後間もなくの蒲田を舞台にしたNHKの人気・朝ドラ「梅ちゃん先生」。番組の始まり、S.M.A.Pが歌うテーマソングに乗って制作スタッフ、キャストのテロップが流れます。その中に「旋盤指導・佐久間正巳」の名が表示されます。

すでにご存じの方はいらっしやるかと思いますが、西蒲田三丁目「佐久間製作所」を営む佐久間正巳さん(四十六)、その人です。お父さまの幹夫さん(九十一)は、「大田の工匠百人」の初年度優秀技能者として表彰され、本紙第三十四号(平成二十一年十一月一日発行)で紹介させていただきました。

ご子息の正巳さんの存在が、蒲田から全国へ知られるようになったいきさつはこうです。昨年、NHKから大田区観光課に、「梅ちゃん先生」という朝ドラを制作するので、戦後の大田区を知っていて、町工場をやっている人を紹介してほしい、と依頼があったのです。ドラマのヒロインは、逆境の中をひたむきに地域医療に取り組む若い開業女医、舞台は町工場の多い

蒲田。医院のお隣は町工場の代表のような家族で懸命に働く小さな工場というもの。白羽の矢が立ったのが幹夫さんでした。

昨年暮れ、幹夫さんは、正巳さんと共にNHKのスタジオを訪ねて、戦後の大田区の町並みや工場内の工機の配置、作業工程など、こと細かに指導しました。本格的に現場の撮影が始まると、不規則な時間帯もあつて、旋盤などの技術指導は正巳さんにバトンタッチ。それから正巳さん一人がスタジオ入りして指導にあたっているのです。正巳さんは次のように語っています。

「父親と一緒に話を聞きました。蒲田が舞台であるし、町工場の現場もたくさん出てきます。蒲田のことを全国の皆さんに知ってもらいたい機会になるだろうと快く引き受けました。スタジオに行く、週ごとの台本を先に手渡されましてね。旋盤の技術指導だけでなく、工場を使う専門用語の穴埋めもしています。ドラマの工場内で積み上げられている箱の中のネジはウ

チで作ったものなので「す。」

正巳さんは面白い舞台裏を教えてくださいました。片岡鶴太郎さんが演じる幸吉がアールに丸く削ることになるシーンがセットされていました。本番撮影では、素人には難しすぎるということになったそうです。そこで、正巳さんが実際に加工。手元だけを撮影して、あたたかも幸吉が加工しているようにオンエアしたということでした。

昭和三十年代以降のストーリーは、ドラマの「安岡製作所」は、さらに重要な役割回りになっています。それは新幹線の車輪の軸にはめ込んで振動をやわらげるオイルダンパーの中の部品作りです。七月初め、正巳さんはNHKで車輛制作会社、番組担当スタッフと打ち合わせをしたそうです。

物語の中で信郎が、誰にも真似できない技術に挑戦する情熱は、もの作りをしている町工場の人たちの思いを表現していて、正巳さんの指導の見せ所とも言えるでしょう。正巳さんは「梅ちゃん先生」のドラマ制作に携わること、父・幹夫さんの労苦に思いをはせて感慨深いものがこみ上げているに違いないと語ります。

(取材 六車、瀬川委員)

# 蒲田で撮影された映画『やわらかい生活』

森重プロデューサーと廣木監督を訪ねて



©ステューディオスリー

頃というところで、蒲田には撮影にふさわしい場所が見つからず、茨城県高萩市に大規模なオープンセットを作った。撮影が行われた。蒲田の住民としてはとても残念であるが、やむを得ないことである。蒲田が舞台といえ、松本清張の『砂の器』なども有名で、これまでに何度もリメイクされているが、作品の一部に蒲田地区が登場するだけである。

## 撮影も蒲田で行われた映画

ところが、蒲田が舞台であるというだけではなく、撮影のほとんども蒲田地区で行なわれた映画があった。それが今回採り上げた『やわらかい生活』(二〇〇六年)である。原作は芥川賞作家、絲山秋子さんの「イツツ・オンリー・トーク」(文藝春秋刊)で、原作もやはり蒲田が舞台となっている。



©ステューディオスリー

主演の寺島しのぶ(右)と豊川悦司(左)



廣木隆一監督(左)と森重晃プロデューサー(右)

簡単にストーリーを紹介すると、主人公の優子(寺島しのぶ)は一流大学を出て、大手企業で働いていたが、両親や恋人の死をきっかけに躁鬱病に罹り、会社を辞め、入院を繰り返していた。ネットで知り合った男(田口トモロヲ)と偶然やってきた蒲田が気に入る。アパートを借りて独り住まいを始める。そこで元同級生の議員(松岡俊介)や鬱病のヤクザ(妻夫木聡)と知り合い、また、福岡に住んでいた従兄の祥一(豊川悦司)が彼女のアパートに転がり込んできて居候を始める。彼らとの関わりの中で優子の心にも少しずつ変化の兆しが現れてくるのだが：。

## 「粋のない下町」

映画の中で、優子は蒲田のことを「粋のない下町」とネットに書き込んでいる。この言葉をどう解釈したらいいのか悩んでしまうが、どうやら「狼狽ではあるが、無気力な自分をも受け入れてくれる温

かさのある、不思議と居心地のいい町」ということらしい。映画は、東急ビルの屋上で観覧車に乗るシーンを始め、西口の駅前広場、サンライズアーケード、呑川、つたが象の形をした喫茶店など、私たちが普段目にしていない蒲田西地区のあちらこちらで撮影されている。ほかに多摩川の河原、東口のお風呂屋さん、タイヤ公園、池上本門寺など隣接地区でも撮影されていて、地元に住むものにとっては、映画そのものとは別の興味もそそられる。



蒲田駅西口の駅前広場



東急ビル屋上遊園地の観覧車

## 蒲田の印象

梅雨の合間の七月の暑い一日、渋谷の事務所に向いて、映画を作った森重晃プロデューサーと廣木隆一監督にお話をうかがった。はじめに蒲田についての印象をお聞きしたところ、お二人とも、蒲田は思っていたよりも小奇麗な町だということだった。都内というよりも地方都市的な雰囲気があるって、大阪でいえば十三(じゅうそう)といった感じだそうです。残念ながら筆者は十三には行ったことがないのでイメージが浮かばないのだが、お話から察して、あまり上品ではないけれども気取りがなく活気がある町、と勝手に解釈した。東急ビル屋上の観覧車は、とても気に入ったそうで、「カワイイ」を連発していた。筆者も乗ったことがあるが、ビルの屋上にあるせいか思ったより高度感があり、

結構スリルがある。また、お二人は、一つの街にサンライズとサンロードという二つのアーケード商店街が並んでいることにも驚いたという。

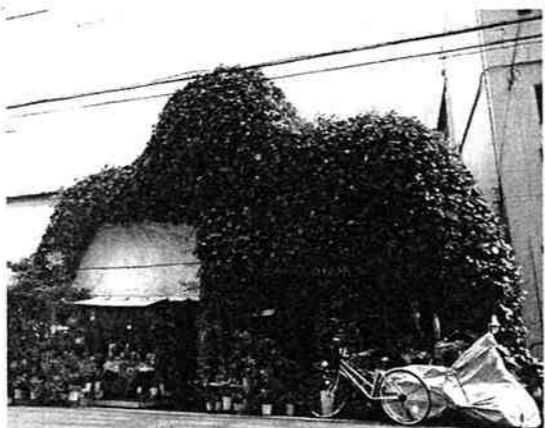
## こんな撮影秘話も

撮影秘話をお聞きしたところ、映画の中で季節は年末ではないのだが、撮影を十二月に行なったため、商店街ではすでにクリスマス飾り付けや歳末セール横断幕が掲げられていた。そこでやむを得ず、商店街に頼んで撮影の時にだけ飾り付けや横断幕を外させてもらい、撮影後にまたもとに戻したということだった。映画の撮影には、ただ出来上がった作品を見ているだけでは気がつかない、大変な苦労があるものだと感心した。

映画の中で、優子の恋人は地下鉄サリン事件の犠牲となって死



タイヤ公園



つたが象の形をした喫茶店

だことになっているが、奇しくもオウム真理教最後の指名手配者、高橋克也容疑者は西蒲田のマンガ喫茶で逮捕された。これでまた蒲田が全国の知名度となつてしまつたが、蒲田という町はひっそり身を潜めて生活するのにもふさわしいところなのであるうか。インタビュの最後に、機会があったらまた蒲田で映画を撮ってくださいとお願ひして事務所を後にした。本紙に撮影に使われた場所の写真を何か所か掲げておく。是非映画をご覧になって、撮影現場を確認しながら巡ってみてはいかがだろうか。

(取材 都築・多田委員)